

現在「龍福寺」となっている

大内氏館は どんな館だったのでしょうか？

館が設置された場所

大内氏館が設置されたのは、一の坂川が形成した扇状地のほぼ中央部にあたる平地です。館や館周辺の発掘調査では、大内氏が館を設置することにより、寺社や家臣の居住地が配置されるなど、町割（まちわり）が整備され館を中心として山口のまちが都市化していく様相が判明しています。

図1参照

館の構造

屋敷地の周囲に溝や堀を巡らして、屋敷地の内と外を区画する方形居館でした。現在の館の史跡指定地は、16世紀後半に、毛利隆元により大内義隆の

菩提寺として龍福寺が設置されたため、ほぼその境内地が指定範囲となりますが、屋敷地が最大であった16世紀前半頃（当主：大内義隆）には、指定地の西側や南側にも屋敷地が広がっていたと想定されています。

図4~5参照

見つかった遺構

【外郭施設(館の内と外を区画する施設)】

溝や堀で屋敷地の内と外を区分し、さらにその内側に築地塀もしくは土塀を築いていました。史跡指定地の北端には土塁を、南端・東端には塀の基礎となる築地を復元し、南端・東端では築地の外側に堀の位置を表示しています。西端には、16世紀前半頃の西門と塀を復元しています。発掘調査では門や塀

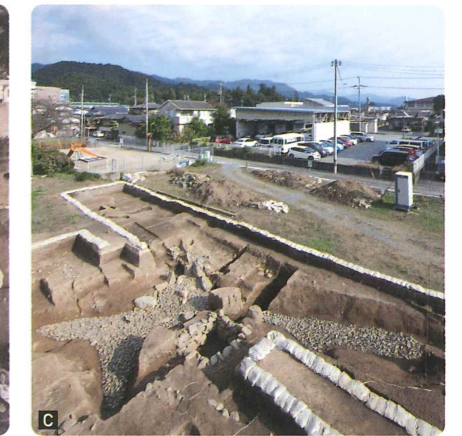
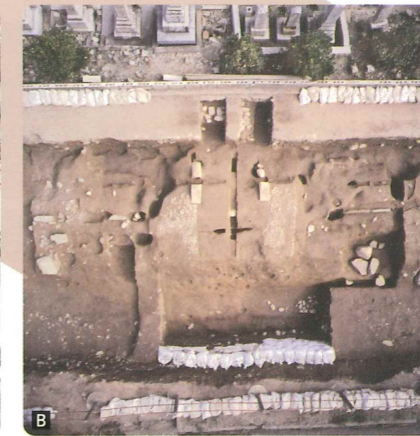
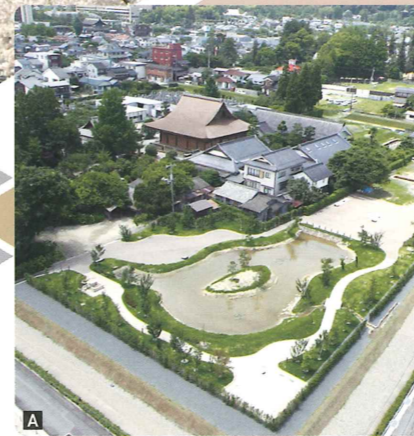
の柱穴が見つかっており、柱穴のサイズから門や塀の規模を復元し、門は室町時代の絵図を参考に再現しています。

写真B・F

【建物】

これまでに行ってきた発掘調査は館の外縁部分が主となるため、屋敷地の中核となるような建物の配置は不明ですが、蔵の跡や、庭園を鑑賞するための建物の跡が見ついています。現在、龍福寺本堂が建っている場所の発掘調査では、掘立柱建物跡の一部を検出しています。大内氏館から出土する瓦は、出土数が少量で、屋根の棟に葺かれる棟瓦が主となるため、総瓦葺の建物ではなく、屋根の頂部だけに瓦を葺く建物が建てられていたと推測されます。

写真E



A 復元された池泉庭園(2号庭園)側から見た現在の大内氏館跡
B 西門検出
C 枯山水庭園(4号庭園)
D 池泉庭園(2号庭園)
E せん列建物
F 東2号塀

※B~Fは発掘調査中の写真

【庭園】

4つの庭園が発見されています。このうち、北西部の枯山水庭園と、南東部の池泉庭園を復元しています。3つの庭園(枯山水庭園2箇所、池泉庭園)は16世紀

前半(図4)に同時に館内にあったもので、庭園の規模から、少人数で鑑賞するための庭園(枯山水庭園)と、大人数で鑑賞するための庭園(池泉庭園)で用途が分けられていたと推測されます。池泉

庭園の周囲には、儀礼や饗宴を行っていた「会所(かいしよ)」とよばれる施設があった可能性が指摘されています。

写真C・D

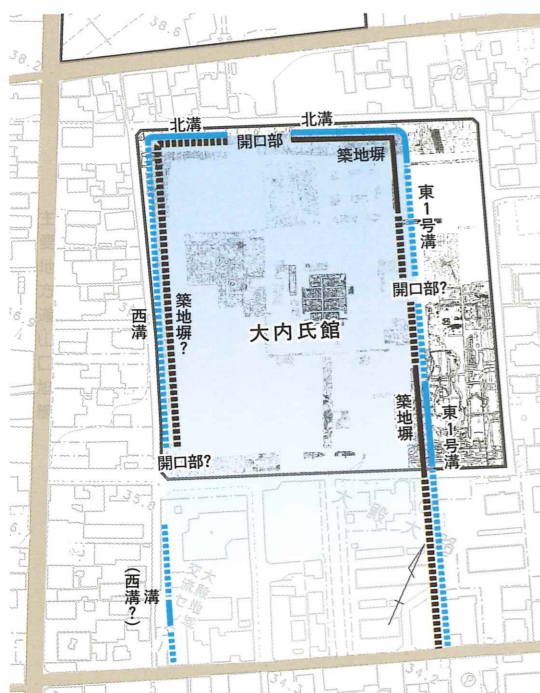


図1 大内氏館第1段階
14世紀末~15世紀前半



図2 大内氏館第2段階
15世紀前半~後半

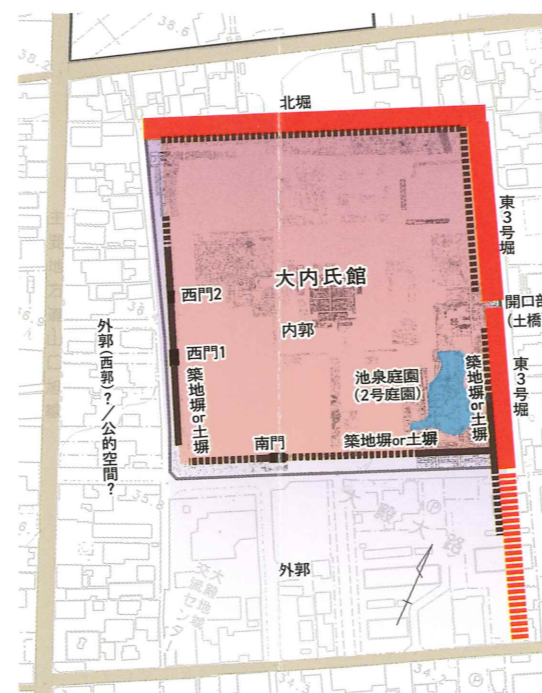


図3 大内氏館第3段階
15世紀末~16世紀初頭

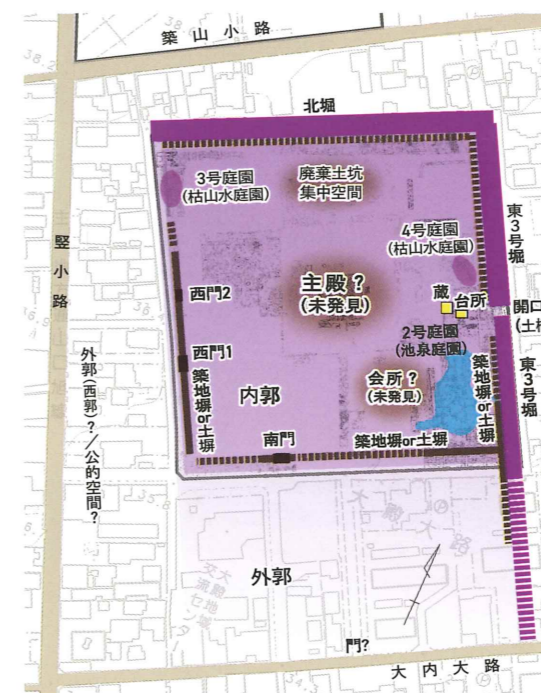


図4 大内氏館第4段階
16世紀前半~中頃

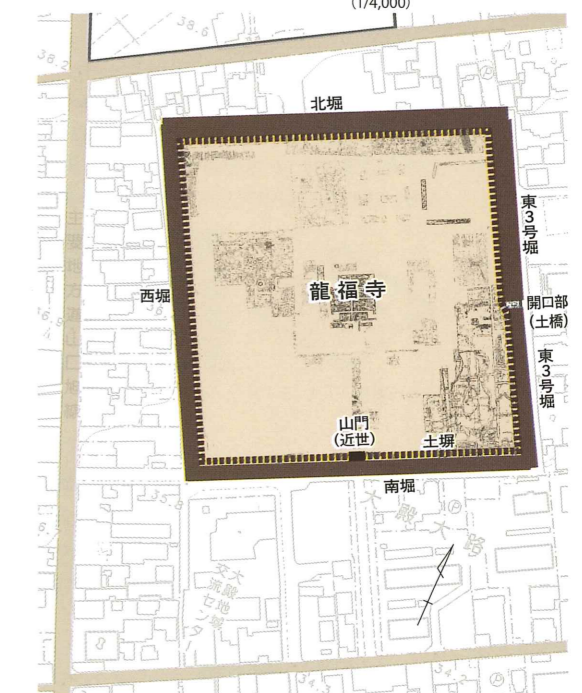


図5 龍福寺期
16世紀後半

0 100m
(1/4,000)